

となりの女

喜多川雅人

早寝早起きがモットーの中川一朗の朝は早い。五時半前には目が覚める。床に入るのは八時半だから、九時間は寝ることになる。隣りのベッドでは、七歳年下で、元旦に喜寿を迎えた老妻の麗子が爆睡している。彼女を起こさないように、布団からおもむろに右手を出して、セットした目覚まし時計のスイッチをオフにした。一日の始まりである。

今日は正月が明けた八日だ。平常に戻る、といっても毎日が日曜日ではあるが……。一朗の毎日の仕事は、昨晚洗って水気が消えた食器をしかるべき棚に移し、アメリカンブレックファースト用のセットを食堂のテーブルに並べることで始まる。

それが終わると、外階段で二階の我が家から一階に静かに下り、ポストから朝刊をピックアップする。足音を忍ばせるのは、一階は三人の若い女性に賃貸しているので、朝が遅い彼女たちに遠慮しているのだ。

戻って洗面に移る。百円ショップで求めた使い捨てのカミソリは、元旦に替えてから一週間経っている。若者だったら一回でポイ捨てするのだろうが、戦前生まれの八四歳の吝嗇爺だから、一週間は使う。そもそも髭が薄いのも幸いしている。鏡に映った年相応の顔と対峙しながら、丹念に十分余り剃る。女性のお化粧のようなものである。

その最中に、麗子さまが脇を抜けてトイレに入った。お目覚めのようなのである。「おはよう」と、素っ気ない一言がこちらに投げられる。

「……」返事は無言である。シェイビングクリームを塗った白い顔でコクリと頷く。これに限らず、会話は常にミニマムだ。

それが終わると、一朗は朝食が出来上がるまで、書斎に閉じ籠ってメールを整理し、デジタル版の新聞二紙でニュースを拾い読みする。書斎は三LDKの二階の東側にある。広さは六畳だが、溜め込んだ本、辞書、書類、飾り物、その他もろもろで、足の踏み場もないほどだ。壁には、一朗が航空会社で飛び回った現役時代に、世界各国で集めた怪しげな女性の写真も何枚か飾られている。お気に入りには、女性が裸でスキーしている一枚だ。書斎のドアは開けたままだから、台所での老妻の包丁の捌きがコツコツと響いてくる。

そうこうするうちに、書斎の窓から望むシモキタの家並みを隔てて、一キロほど先の空が薄く赤らみ始める。

中川家は、その昔、昭和の初めまで、この界隈が雑木林の丘だったところの天辺にあるから、緩やかな傾斜の先に凸凹と広がる住宅街の屋根を越えて太陽が昇ってくるの

を拝める。東の空は秒ごとに青みを増し、紅に染まって、七時には真つ赤な太陽が全貌を現わした。

「凄い朝焼けだよ、観る？」と、台所に向かつて一朗が珍しく声を投げる。間を置かず麗子がすうーっと現れた。

「あらキレイ」と、一言。「ご飯ができたわよ」と続く。一朗がコクリと頷く。頷く代わりに、気分によってはパンパンと両手を合わせて答えることもある。会話は最少限なのだ。

中川家の東側の隣には、石塀を隔てて、三階建てのマンションがある。外壁は瀟洒なレンガ模様だ。敷地は二百坪もあろうか。一朗とは幼馴染の兄妹二家族がオーナーとして一階に住み、二階、三階は賃貸している。広い庭には、赤松、藤、つつじなどの植木が、具合よくおさまっている。

一朗の書斎からは、五m先に、そのマンションの二階右端のテナントのテラスが望める。外壁から一mばかり南に突き出しており、日当たりがよい。洗濯物を吊るす丸く灰色の金棒が横長に架かっている。

目を左に走らすと、壁から少しとび出た灰色のコンクリートの部分がある。シャワールームになっているようで、暖かいオレンジ色の電灯に浮かんだ開閉式の細長い窓には、動いている裸体のオレンジ色の影を望める。

洗濯物の出し入れで、その住人がテラスに姿を現わすことがある。端麗な横顔で、ほどよい背格好だ。二十代の後半か三十代の前半といったところか。

動きも手際良い。干してあるのはシャツ類で、ブラジャーも端の方につるしてあるが、それ以外の下着は室内で処理しているみたいだ。

こちらからはよく見えるものの、一朗の部屋の窓には網目の白いカーテンが掛かっているから、先方にはこちらの部屋の中は見えないだろう。不良老人の「覗き」には都合がよい。なにかと怪しげな連想が広がる。洗濯物は、同じものが一週間近く吊るされているのは、いかなる事情があるのだろうか。

航空会社上がりの一朗が思い浮かべたのは、国内線か短距離国際線のスチュワーデス(CA)である。勤務シフトによっては、一週間も家に戻らないことがあるのだ。

年を越して、賀状の整理・始末も終わった頃、正月には姿を消していた洗濯物が、またまた復活して隣りのテラスに架かり始めた。なぜか懐かしい気分がするから可笑しい。それを目に入れながら一日の大半をノートパソコンで過ごす日々が再開した。

ところが一週間過ぎても洗濯物は同じ品揃えで、それらが変わった形跡がない。シャワールームが使われる気配もない。なにかおかしい。

十日も過ぎたある朝、メールの整理に励んでいると、けたたましいパトカーのサイレンが響いてきた。近い。表に飛びだす。十メートル先の角を曲がると、緩い坂道の中ほどのところにパトカーが止まっついて、物々しい。

人声が聞こえ、隣りの表玄関から、担架が運びだされてきた。全身が白い布に覆われ、顔も見えない。それを追うように出てきた隣りのマンションのオーナーH夫妻の顔が蒼白だ。

「どうしたの？」と、一朗。

「うちの二階のテナントさんが自殺したみたいですね」と、Hが呟く。

警察の検証が終わったのだろう、一週間後には洗濯物は消え、一朗の小さな楽しみも消えた。一つ歳を取った感じだ。(完)